

幼児の発話分析による宗教的学習クラスへの参加過程

高畠 眞知子
(お茶の水女子大学)

問 題

幼児はどのように見えない心的事象を説明するようになるのか。心の理論に基づく心的状態を表現する語の出現に関する研究では、活動文脈によって使用する心的表現語の種類が異なること (Bartsch & Wellman, 1995) が示されてきた。従来の家庭や保育園での観察以外に、心的事象を直接やりとりする宗教的学習クラスではどうだろうか。幼児の参加態度がどのように変化していくかを相互作用における発話のスタイルによって検討する。

理論的枠組みとして、学習クラスでの幼児と教師との相互作用は、幼児の知識に関連する範囲内で展開され、幼児のクラスへの参加態度として観察されると考え、子どもが小集団活動に参加する過程として4過程を想定した。①幼児の既有知識の近接領域に教師からの働きかけが生じた場合、幼児から教師への応答として知識が明示化され、②応答により明示化された知識は附加や説明として精緻化され、③幼児の理解知識の再考として質問が生じる。さらに、④幼児自身から教師に対して理解知識の近接領域を提示する方略として、自ら話題を提供する叙述や教師とやりとりの場を形成するための心的表現が産出される。最後の相は、既に幼児が理解している心の理論から生ずるものである (Karmiloff-Smith, 1992) と考え、幼児の知識が明示化され、既有知識として新奇事象の理解に利用される場を作るための心的表現語の出現を見た。

方 法

被験児 Y市内のプロテスタント系キリスト教の教会学校に出席する幼児 12名の縦断的観察から3名の事例を分析した。Y児 (4歳2ヵ月~4歳10ヵ月)、N児 (4歳10ヵ月~5歳6ヵ月)、K児 (5歳7ヵ月~6歳3ヵ月)、共に初来時は3歳。

観察期間 2000年4月~12月の9ヶ月間。毎週日曜午前8時30分~9時20分 (50分間) から、幼児だけの学習クラス約20分間の行動と発話をエピソードとして分類し、分析対象にした。

データ収集法 箕浦 (1999) によりフィールドノートを作成。クラスでは傍聴の親に混じって定位置で観察し、心の理論との関連から心的状態を

表現する語に関するやりとりに注意を払った。

分析枠組み 幼児と教師のやりとりを幼児における6つの文脈 (応答, 附加・説明, 質問, 叙述, 心的表現, 挨拶他) に分類し、前期から後期への年齢に応じた相互作用ユニットの変化を調べた。

結 果 と 考 察

3児の前期・後期における文脈別相互作用ユニット数 (比率) を Table 1 に示した。各幼児において応答文脈での相互作用ユニットの比率が半分以上を占めた。幼児の学習クラスでの活動は、教師からの質問に答える場合が多かった。

相互作用ユニット数は K児, Y児に比べて N児において前期から後期に変化が見られた。N児はすべての文脈で前期より後期において相互作用ユニット数の増加が見られた。N児が積極的にクラスの活動に参加していったことが示された。特に、前期において観察されなかった心的表現が、後期で観察され、N児が教師との相互作用の場を作り出すために、心的表現を使用し始めたことが示唆された。

幼児の学習クラスの特徴として、教師からの質問に対する応答性があげられるが、同時に年齢や在籍期間によって、幼児のクラスへの参加態度が変化すること、特に教師からの一方的な働きばかりではなく、幼児からの働きかけが理解の場を作り出していくことが示唆された。

今後の課題として、発話内容の分析により具体的内容から抽象的・宗教的内容への幼児における理解の変化を記述することを目指している。

Table 1. 3児の前期・後期における文脈別相互作用ユニット

期 間 (年:月)	Y 児		N 児		K 児	
	前期 4:2-4:5	後期 4:7-4:10	前期 4:10-5:1	後期 5:3-5:6	前期 5:7-5:10	後期 6:0-6:3
相互作用ユニット総数	23	38	69	139	55	59
応 答	16 (70%)	25 (66%)	46 (67%)	73 (52%)	42 (76%)	33 (56%)
附加・説明	6 (26%)	9 (40%)	10 (14%)	28 (19%)	8 (15%)	13 (22%)
質 問	1 (4%)	2 (5%)	11 (16%)	22 (16%)	1 (2%)	3 (4%)
叙 述	0	0	2 (3%)	8 (6%)	0	6 (10%)
心的表現	0	1 (2%)	0	9 (6%)	3 (5%)	1 (2%)
挨拶 他	0	1 (2%)	0	1 (1%)	1 (2%)	4 (6%)

(註) 括弧内は総数に対する比率